

PHD LETTER

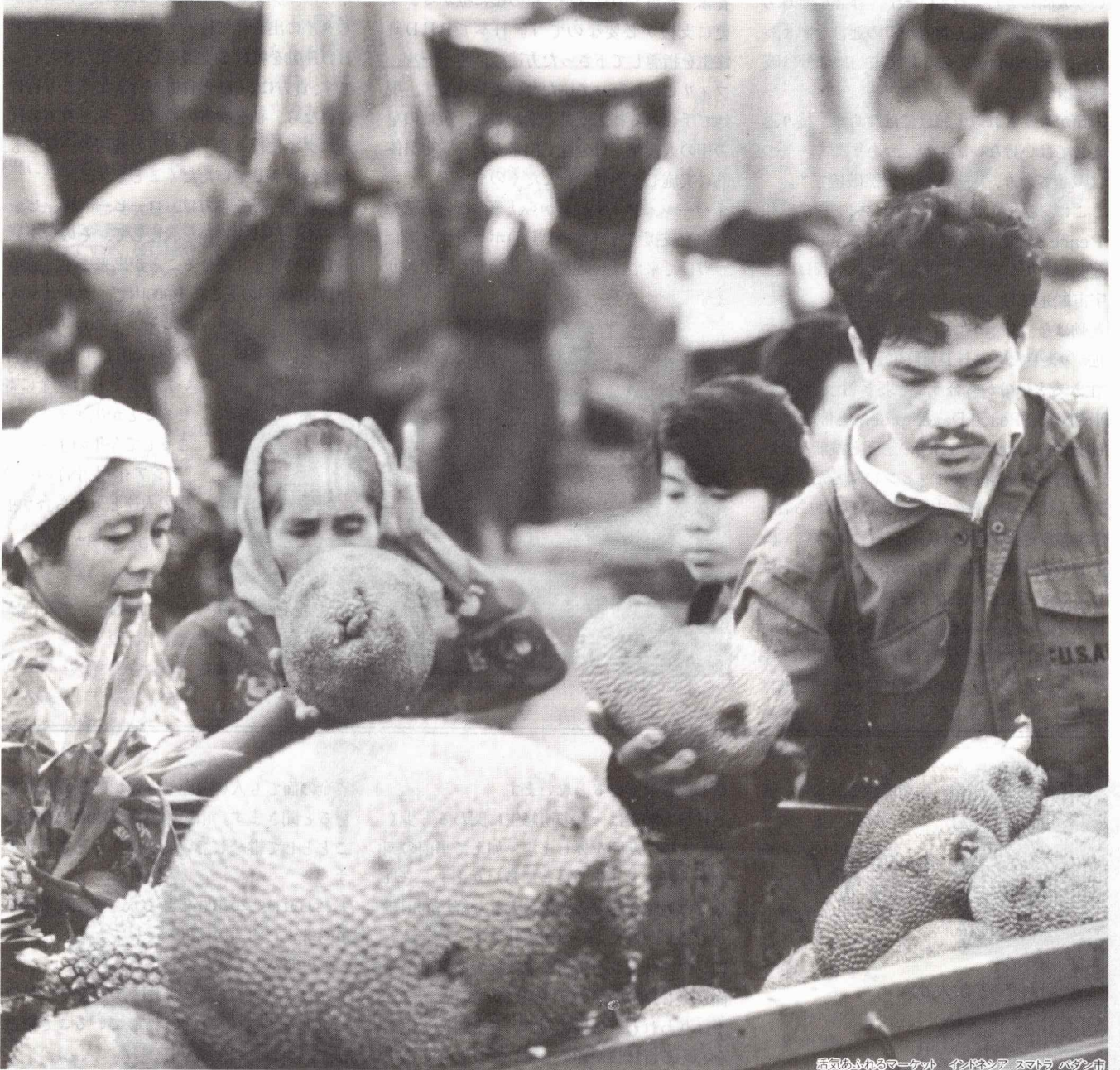
<17>

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 1985・12

PHD運動とは1962年(昭和37年)より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事された岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげ、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年(昭和56年)からはじまりました。

発行:財団法人PHD協会
編集人:草地賢一
住所:〒650 神戸市中央区元町通5-2-3
甲南サンシティー 元町ビル711 TEL(078)351-4892
郵便振替:神戸1-29688財団法人ピー・エイチ・ディー協会
定価:100円
レイアウト:エフアンドエフ

- 分かち合う年末を……………P2
- 人類の歴史に学ぶ健康のあり方—久保昌子氏にきく……………P3



活気あふれるマーケット ｲﾝﾄﾞネｼﾞｱ ﾏﾞｼﾞﾝ市

アジアを訪れたら、必ず市場に足を運ぶ。
訪問地が外国の影響を受けたモダンな街であっても
市場には、その国の庶民の表情がある。
野菜、果物、香辛料、魚、肉、雑貨など
構えの小さい店が集って、そこにまた人が集まる。
その土地の言葉がわからなくても
1本の串焼き、1個のマンゴーがお互いの笑顔をよくぶ。

分かち合う年末を



PHD運動提唱者
PHD協会理事 岩村 昇

宇宙船地球号は、天地の理法によってその運行が司られている。その運営は私と貴方という人間に委ねられています。宇宙船地球号の乗組員である私と貴方がその運営を誤ったら、此のかけがえのない宇宙船地球号は破壊です。人類がもうこれ以上続けてはならず、繰返してはいけぬ誤ちが二つあります。一つは戦争であり、もう一つは自然破壊です。ここに、自然と人工のバランスの中で平和Peaceと健康HealthをつくるDevelopment運動があります。この運動を拡げれば、宇宙船地球号は救われるのです。

運動は今、日本からネパールとフィリピンに拡がりました。PHD研修生として日本に来、"生きるとは分かち合うこと弱者と"という平和づくりPeace Developmentと健康づくりHealth Developmentの態度と技能を身につけてネパールとフィリピンに帰った一人一人が、土と水と緑の中で弱者と分かち合って生きる運動を始めました。

PHD運動は、私と貴方が100パーセントを献げることになりそして続きます。アジア・南太平洋から草の根青年を日本に迎えて研修をしてもらってだけでなく、それぞれの国に帰って一人一人の生活の現場でPHD運動を拡げ

てもらおうフォロー・アップします。

ネパールでは養豚、編物等、フィリピンでは養豚、養魚等の営みが、草の根に広がるよう、更に支援が必要なのです。日本でPHD研修生を指導して下さった方達に、ネパール、フィリピンに行っていたいであります。現地地で手に入る物と道具を活かして、現地の草の根の人達が"自分達で出来る営み"を具体的に実施して見せていただくのです。

ネパール、フィリピンから、「草の根の人達の自立を支援する日本のPHDボランティアにつづけて来てほしい!!」との要望が出ております。



ネパール結核予防会のボランティアと村をまわる岩村博士(中央)

今年、タイからもPHD研修生が日本に来ております。彼が研修を終えてタイに帰る来年には、フォロー・アップの為に、こちらからタイに出かけて行って、彼がタイの村でPHD運動を拡げる支援をしていただきたいのです、貴方に。私と貴方が行かなくても行けないなら、私と貴方の役割は、私と貴方の代理にタイに行って下さる方の費用の一部でもお手伝いさせていただくことです。

こうして、私と貴方は、コーヒー一杯、ビール一本、タバコ一箱を我慢して、その分をPHD運動資金に寄せることが出来ます。忘年会費1,000円のところを900円で、クリスマス・プレゼント500円のところを450円ですませて、浮いた分をPHD基金に寄せることが出来ます。

こうして今年の年末は、"アジア・南太平洋の草の根の人達と分かち合う年末"にしましょう!!

にも現われていると思います。

PHDの働きは一人の研修生に関わると少くとも5年の期間を要します。加えて事前の調査を入れると6年の長きにわたります。それだけに地味な運動の継続は大きな経済的困難からまぬがれにくいのが現状です。

アジアの悲惨さを訴え緊急救援の必要性を表面に出した募金という誘惑にかられながらもやはりわれわれは地道なをして継続的な応援を心ある皆様にお願ひしていこうと考えます。

それはわれわれの運動がアジア・南太平洋の草の根の人々の「自立」への参与という息の長いものを願っているからです。

先号にも書きましたように日本には定着した国際交流、協力の団体が残念ながら充分育っていません。私の知る限り「日本キリスト教海外医療協力会」が最も古い団体が今年創立25周年を祝った程度です。その点欧米には100年を超える伝統を持ったものがたくさんあり

資金の面でも人材の面でも豊かに整えられていると聞きます。市民の協力が地道に当然のこととして継続しているということでもあります。

われわれはこの100年あまり、特に欧米諸国から非常に多くの援助を受けてきました。GNPが世界第二位になったといわれている今、日本はより苦しんでいる国々や、人々にそのお返しをする順番が回ってきていることを認識しなければなりません。

世界中に「平和」と「健康」が割り出されるために今、アジア・南太平洋の草の根の人々が求めているものは必ずしも「もの」ではありません。村の中で「自立」を生み出す「人材」であります。われわれの人材育成運動へのご支援を切にお願ひするゆえんであります。

(総主事 草野賢一)

地道で 継続的な支援を!

求められる日本人の 国際市民的認識

最近のもっばらの国際緊急救援活動の関心は「アフリカの飢え」に対してであり加えてメキシコ大地震救援であります。

日本人の人々の中に他国の苦しみと共に担おうとする暖かい心が根付きつつあるのは本当に嬉しいことです。しかしわれわれの心のうつろいやすさは既にタイ・カンボジア国境の27万人にもよる難民の存在を忘れつつある事

編集部(以下編と略す) PHD運動に加わられたきっかけをきかせて下さい。

久保(以下久と略す) 以前、戸田先生、黒住先生とネパールにかかわってこられた方々と仕事を共にさせていただき、ネパールのことは伺っていました。岩村先生のお話しも伺ったことがあります。知り合いの紹介で、ガウチャンさんの委員会に出席していますが、私はお声かけがなければどこにも顔を出さずほうなんです。私か彼のお役にたてるかどうかはわかりませんが、私の中から何かを引きだしてくれればと思って参加しています。アジアやアフリカに困った方々がおられ私たちも何か協力を考えていましたが、その姿勢として、施しては無く、そこに生きる人たちの力による事態の改善をお手伝いするPHDの研修事業に共感できたのです。

編 ガウチャンさんはネパールの村で主に結核患者を対象に栄養改善をボランティアとして行っているわけですが、彼に期待するもの、また彼への助言をおきかせ下さい。

久 私はネパールの状況をよく知りませんが、具体的なことは言えないのですが、食べ物改善による健康状態の変化は、結果が良い方、悪い方のいずれにせよともすぐには結果がみえません。だから日本での経験によってすぐネパールの様子をかえることができるように、功をあげると思いません。

また私のこれまでの経験からも、ものごとにとりくんでいる最中には仲々成果を測ることができなくて、数年先になってやっと評価できるようなことが多いです。栄養改善という彼の研修内容には、表面的な技術だけを勉強するんではなくて、村の人たちに栄養改善の必要を納得させていく試みが、すぐ結果はでなくても、続けていく意義がある

ののだというのをわかって帰って欲しいと思います。彼の意識が驚けば、彼をパイプとして日本からネパールに栄養改善のヒントが届くでしょう。

また、今、彼は大豆製品に焦点をあて研修をされていますが、日本人にとっての豆腐・味噌がどのような歴史を経て、存在しているのかを一度整理し、そのままネパールにあてはめるのではなくてネパールの風土・歴史・食生活に合うネパールの人にとっての豆腐・味

人類の歴史に学ぶ 健康のあり方

—久保昌子氏にきく—

くほまさこー栄養士。兵庫県芦屋市保健センター主任。兵庫県栄養専門学校卒業。須磨赤十字病院(神戸市)、芦屋市民病院勤務を経て現職。現在PHD研修生N・ガウチャン(ネパール)研修委員会に参加。

贈にあたるものを、ネパールの人の手で作るもしくは見つけることが必要でしょう。

編 ネパールの健康へのとりくみを考えていくと同時に、我々自身の生活が果して健康的なのかを考えなければと思いますが。

久 私は人が妊娠して出生から死ぬまでの過程において、いかに生命が守られているかその社会の文化の尺度だと考えています。それからすれば日本は経済発展をとげましたが、公害が発生したり、自然なものをないがしろにして健康をそねっています。決して胸をはれるものではありません。

編 日本では病気になってからの体制は一応とれているわけですが、それ以前の健康を維持し、病気になるように生活するということがおそろかになっているのですか。

久 健康を守るために食べるということは基本ですが、私たちは祖先の経験の積み重ねをこの食べるということの上でも大事にしなければいけないのです。食の歴史とはひとつの人体実験だったわけですから、しかし、現在はこれまでの蓄積よりも、コマーシャルやマスコミの情報がありかたがり、信じているのではないのでしょうか。からだに必要で食べているのではなく、情報によって食べさせられているのが今の日本人ではないでしょうか。ひとつ例をあげてみます。夏にノドがかわく、その時に砂糖のたっぷり入った清涼飲料水は良くない。ここまではいいのですが、からだのために100%果汁のミカンジュースを飲むとします。これは自然なことでしょうか。夏にミカン、これがまず不自然、さらにジュースの場合、果物の状態ではとても食べられない量が飲めてしまい、必要以上の糖分をとってしまう。日本の夏ならスイカを食べる方をおすすめします。このように一見、健康的

かつ自然にみえるものでも注意を払うとおかしなことがいくつもあります。牛乳を飲むと下痢をしやすい大人が、無理に牛乳で栄養をとらなくてもいいのです。

編 同じように豆乳の嫌な人が無理に飲まなくても他のもので代わりになればいいわけですね。

久 そうです。また、本来人間はからだを動かさず、食べものを得てきました。そのために



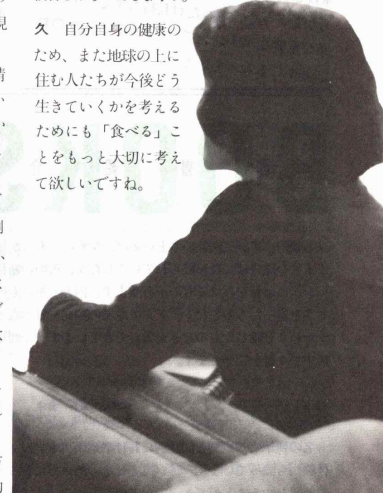
筋肉を使い、そうすると筋肉から生理的なサインが出て、食べ、バランスがとれていました。ところが運動をしないところに、過剰な

栄養が入ることによって、内臓がとまどう

そして糖尿病や痛風になって表われるのです。何万年の間、飢えとの闘いの中で、便利であった私たちの内臓や生体のリズムが、ここ数十年に起こった新しい生活様式や環境の中でバランスをくずしているのです。

編 ロに入れることができるという、旨いけれど偏ったものを食べ続け、必要なものを食べずに必然的に病気になり、しかもその治療に多額の費用をかけているとしたら、そのエネルギーは無駄としかいえないですね。 そんなエネルギーをもっと別のところに使うことが、今、栄養的に足りている国々の、足りない国々へのひとつの役目ではないでしょうか。

久 自分自身の健康のため、また地球の上に住む人たちが今後どう生きていくかを考えるために「食べる」ことをもっと大切に考えて欲しいですね。



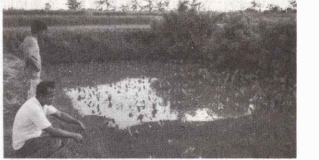
困窮する村に根付かせたいPHD精神

フィリピンの1期・2期生の村を訪ねて 草地 賢一



I-WAMURA PRAYER HOUSE

1985年9月3日フィリピン... 岩村博士、リト君達の出迎えを受けて直ちにベイラグナへ直行しました。



Fファームさん(手前)と養魚池

フィリピン大学地域保健総合計画のドクターギヤズメンと4人の元研修生(今はむしろPHD運動推進者と呼ぶべき)とのミーティングが開かれました。



兵庫県三木市立三木中学校で話を語るガウチャンさん

●プリチャー・ムアンチャンさん(タイ)

あちこちに行って、りっぱな農業の機械を見ます。村に持って帰れたらいいなあと思うこともあるけれど、私だけがその機械をもつと、村のまわりの人たちから、「おまえたいいなあ」とねたまられると思います。



このことを思い出すのが、我が家の朔夜(7ヶ月)をここのほかかいがきっかけ。昔におぶって散歩する時のプリチャーの姿はタイに帰った時の彼の姿を連想させてくれた。

潜在家庭から 西宮市甲東園西山町 田中種子さん 滞家にショープさんを迎えて6ヶ月近く経ちました。家族も彼女をたいに理解し又彼女も私達を含めた日本の生活に慣れ落ちていきました。

研修・フォローアップレポート

3人の研修も折返点をすぎました。これまでに各々のテーマの基本的なところの学習を終え、これからは帰国後の現地環境、条件・要求などに合わせた工夫を指導の方とすすめます。

研修生予定表 table with columns for months (12月, 1月, 2月, 3月) and rows for participants (プリチャーさん, ガウチャンさん, ショーバナさん).

訂正 前号(16号)研修生Fファームさんの記事で、吹出しのセリフのつづりが間違っておりました。訂正します。



●ショープ・ナシヨレスタさん(ネパール) 私が働いている地域の貧しい人々は、私の帰りを待っています。彼等は、私と一緒に仕事をして現金収入を得ることを望んでいます。



●ニラン・ガウチャンさん(ネパール) 日本で売られている物は、流行やデザインが重視されている様ですが、ネパールではどちらかというと、どれだけ長持ちするかという事が重要なポイントで、それが買っ人々の判断基準にもなっています。

BOOKS 紹介

ひと昔前、アジア関係の本といえば、学術的なものか旅行ガイドを除けば、数に限られていましたが、近頃の新刊ラッシュには目をみはるものがあります。

体験的アジアハンドブック ●聯合三書 監修 ●YMCA出版 1200円 8名の執筆者が国別と問題別にわけて東南アジア5カ国を体験から語っています。

第三世界の地域開発 ●長峯晴夫 著 ●名古屋大学出版会 3600円 著者の国連地域開発センター(名古屋)における国際協力の現場体験にもとづく論文である。

市民の海外協力白書～「経済評論」増刊 ●市民の海外協力を考える会編 ●日本評論社 1300円 海外協力にとりくむ日本の市民による活動を紹介。具体例を多数紹介し、ひとりひとりの市民にどのようなかわりをもつことができるかを示している。



クタイオ・パタイ(焼きビーフン)

材料(4人分) ビーフン:300g モヤシ:200g ニラ:100g 豚肉・エビ・厚揚げ:各100g 卵:4個 魚醤油(醬油)、砂糖、酢、塩、粉トウガラシ、マナー(レモン)、ピーナッツ、スープ、ストック又は水:適量

作り方 ① ビーフンは固めにゆでる。② ラードかサラダ油を熱し、水を切った①を入れ、酢、スープ・ストックを少々加えながら、水気がなくなるまで炒め、取り出しておく。③ 油を足し、卵を割り入れ、スクランブル状にする。



④ こそ切れたした豚肉、エビ、モヤシ、5センチ位に切ったニラ、1センチ角に切った厚揚げ、炒めを加え、味をみながら、塩、魚醤油を入れ炒める。クタイオ・パタイを皿に盛り、マナーを添える。

魚醤油とは 魚と塩で作る調味料。ナムプラー(タイ)、ニョクマム(ベトナム)、パティス(フィリピン)、トゥクトレイ(カンボジア)など東南アジアには同類のものがある。

PHDサウンド

PHDレター15号でお知らせしました兵庫県五色町の皆さんを中心とした第4期生受入のための事前現地調査旅行が8月22日～28日に行われました。以下はそのレポートです。



西スマトラの漁村を訪ねて 斎藤 貢

訪問の動機

岩村先生が昨年、五色町の健康道場で断食療法を体験された折、PHD協会、61年度計画でインドネシアの漁業青年受入のお話をされた。「お役に立てれば」とお約束し、漁業協同組合長の理解も得てその対応につき話し合ってきた。その後岩村先生のご紹介で、インドネシアの大学教授、アフィン・ベイ先生（PHDレター14号で紹介）も来町され、受入れ予定の川崎藤勇さん宅も訪問された。その後、川崎さん（町漁業振興審議会委員）は委員会からの帰路、事故により帰らぬ人となられた。「川崎さんの意志を生かさう」と漁業協同組合長、柳里氏の熱意により、今回のインドネシア訪問が実現した。



プキティンギ市で地元の子どもたち

西スマトラの漁村を訪ねて

8月22日、大阪空港より、タイ航空で出発。参加者は、五色町より坂口さん、藤井さん、勢造さん、柳さんと私。三原町の佃さん、神戸の広瀬さん夫婦、そしてPHD協会の草地理主の9名である。23日、赤道直下のやわつく太陽の下、タビン空港につく。アンダラス大学助教授で西スマトラ州議会議員のシャリフ・アリ先生他多



村の市場で

数の出迎えを受け、以後滞在中のすべての案内、通訳のお世話になる。先生は神戸大学で数年間学ばれ、その時、西宮市出身の奥さんと結ばれたと聞く、人間的な暖かさ、大きさを兼ね備えられ、ユーモアにも富んだ方である。旅の楽しさが倍加されたのも先生のお人柄によるものだと感謝。24日、西スマトラ州庁舎に知事を表敬。副知事及び幹部と懇話。漁業の実態と振興方針の説明を受け、五色町との友好親善を深めた。引き続き、バダオン市議会を参観。市議会正副議長、議員多数と懇談、友好を深める。

次にバダオン市長を表敬、副市長を囲んで懇話。土木・企画・漁業・広報・各担当者も同席、農漁業の現況説明を受け、「漁業青年だけではなく、ぜひ各分野の青年に研修の機会を考えてほしい」旨の要望を受ける。日本を見る目のすどさと開発への意欲に頭が下がる。

市内観光をかね、西スマトラ最大の港、テルパユ港を見学。戦争中、日本軍に撃沈されたオランダ商船の残り・保存と日本商品の氾濫には複雑な心境。

25日、私達の目的である西スマトラ州漁業振興協会を訪問。副長、ユースタム氏からプロジェクトチームによる基本計画（漁業開発、技術開発、人材養成、マーケット開発と消費拡大など、総合的な漁村開発）の概要説明を受ける。又、近く冷蔵倉庫の建設に着手するという説明聞き、クラクカラン・ブンガス・

パトングの各漁村を視察。その実態は「貧しい」の一言につきる。伝統的漁法と言われる非近代的漁法、近代化をはばむ各種の要素が内在する。

26日、ベンシルセラタン・郡役所訪問。パーサーズランティの漁村を訪ねる。加工と消費拡大、マーケット開発の必要性をここでも痛感。

27日、州議会議を訪問。プキティンギ市訪問。各所で熱烈な歓迎を受ける。独立40周年記念ミナカバウ文化週開閉式を見学、発展途上国のエネルギーの素晴らしさを感じる。

28日、バリアマン郡訪問、漁村2ヶ所を視察、INS職業訓練校見学、全日程終了。このように本場の草の根に入るためには多くのゲートを経なければならぬということも現地訪問で初めて理解ができた。

この日は、来春受入れ予定の研修生の人選も行い、漁業振興協会職員、ユリ・タムリン君、23才に決定。少年時代に父と死別、漁業に従事、働きながら学び州職員となる。根性のある青年とみうけられる。

今回の西スマトラ訪問は私にとって素晴らしい体験であった。豊かさ慣れた日本人の本当の役割を教えられた様な気がする。

連日の現地新聞の報道にも「ともに生きる社会の実現」としてPHD協会によせる期待の大きさに、責任の重大さをひしひしと感じた。（さいとうみづ・兵庫県津名郡五色町町長）

我々日本にとっては敗戦40年、インドネシアにとっては独立40周年の記念の年。その記念週間の最後の頃、要人訪問である。

午前1時近くになってようやく挨拶がまとまった。「戦争責任の告白と独立のお祝い、そしてわれわれは草の根レベルでの交流を求めたい」という主旨のあいさつは24日以降10回近く斎藤さんの口からなされた。際だった反応はさすがアジアの文化の中、直接にはどの要人からも出なかった。しかし州政府から



浜で網を直す漁師

同行記



8月23日夜バダンのホテルの一室で斉藤さん、佃さん、広瀬さんと小生は明日からの要人訪問のあいさつをどのようにするかを相談していた。インドネシア入国後からこの日についても、「1945.8.17～1985.8.17」の数字が目に入る。

ヤングのコーナー



国際協力のあり方 河合敏夫

かわいとしお 1953年生れ。1981年から2年間、青年海外協力隊から体育の普及・指導のためネパールに派遣される。任期を終え、帰国し、そのネパール経験を生かし、PHD研修事業に協力。昨年、再びネパールを訪れ、ボランティアとして滞在した。現在、横浜高校教員であるが、その現場のみならず、ひろく若い人たちにその体験からの考えを伝えていただきたく本欄に寄稿をお願いした。
連絡先 横浜市金沢区富岡西2-3-14

私が、初めてネパールを訪れたのは、56年7月のことです。そのころの私には、国際協力について深い考えもなく、ただ2年間健康で青年海外協力隊の任務を遂行出来ればと考えていました。そして実際に生活していく中で、協力するというのは、どういうことなのかという疑問から始まり、自分ほどのように活動が続けようかというのか、また、国家をはじめ、民間の団体も、本当の意味での国際協力を理解しているのだろうか、という思いを抱

PHD運動 参加者の声

ドシドシお便り下さい。

PHDの会員制度についてお問合せがありましたのでお答えします。

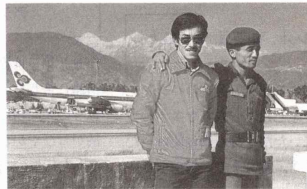
Q. 会員の区別は—
A. 一度おさめていただくことで終身、会員となる終身維持会員、おもちに高校生、大学生、一般の方を対象にしたPHD会員、おもちに小中学生を対象にした友の会会員があります。

Q. 会費の有効期間は—
A. 会費の年度は4月から翌年3月を1年度とします。終身維持会員を除く新年度への切り替えは毎年4月です。

Q. 会費は何に使われますか—
A. 主に、平和と健康を築く人材づくりのために、毎年アジア、南太平洋地域から招く研修生を支える経費(交通費・研修費・滞在費・

くようになりました。そして、国際協力のあり方について、考えれば考えるほど、肯定と否定をくり返し、そのあり方の難しさに考えこんでしまいます。ここでは、国際協力の中の技術協力について、私の考えを述べてみます。技術協力には、人(専門家など)を派遣する場合、人(研修員など)を受け入れる場合、それに機材の供与があります。そして、それぞれが単独で実施される場合もありますが、それらを有機的に結びつけ、協力して行くのが効果的であると考えます。しかし、現実として、そこにはいろいろな問題があります。ほこりをかぶった機材が、倉庫にねむっているに耳にしたことがありますし、燃料を買う現金が無いために、動いていなかったポンプを見たこともあります。また、高価なものならよいという、安易な考えから、せっかく届いても返品され、あるいは、実際には役に立たないものを、形式上納めるといった事もあるのです。その機材が、本当にその国に必要で、適した物であったかどうか? 機材一つにも十分な配慮がなされないと、無駄な協力になるのです。それでは、派遣される人には、問題が無いてしょうか。

その人の取り組み方というか、協力と言うもののとりえ方ですが、富める国と貧しい国の関係、上下関係としてとらえ、協力してやっているのだ、という態度・行動をとってはいないだろうか、それはもう、協力ではなく協力、反感を持たれることになるのです。協力においては、する側もされる側も、対等であるべきなのです。それは、人(研修員)を受け入れる場合にも言えるのではないのでしょうか。国際協力とは、発展途上国と先進国とが、あくまで、対等に、問題解決に向って、努力して行く事ではないかと考えるのです。そこで必要となって来るのが、発展途上国を知るということです。相手国を知らないばかりに、善意から出た協力も、半減してしまったり、時には無駄に終わったりする事があるので、時には無駄にならないようか。私も、ネパール王国のみならず、発展途上国をもっと知り、理解して行きたいと思っています。そして、自分



左が河合さん、ネパールカトマンズ空港

なりに、発展途上国の人々と共に、生きることが出来ればと考えています。

食費など)として、用いられます。この研修生が帰国して、それぞれの地域で村の人とともに村づくりをすすめていきます。またさらに多くの人にPHD運動への参加を呼びかけるための費用、事務局の経費にも用いられます。むろんこのレターの印刷、発送も会費によって成り立っています。ちなみに金報類には一人当たり年間860円程かかっています。

Q. 会員になると—
A. 会員の方にはPHDレター（年4回）とPHD年刊誌、各種行事のご案内をお送りします。またPHD協会主催行事の参加費の割引もありません。そしてPHD運動の推進、拡大のための活動を担っていただきます。

Q. 会費の目安は—
A. 終身維持会員、一口10万円以上。PHD会員、年額一口5千円以上。友の会は年額5百円以上任意の額となっています。例えば一般の方には毎月830円×12＝約1万円(会員2口分相当)大学生・高校生の方には毎月420円×12＝約5000円、小・中学生の皆さんには毎月100円×12＝1200円 ぐらいを目安としています。

รวมกัน เรา อยู่
—PHDのTシャツに感謝!!—
この8月のインド旅行中におきたハッピーな出来事を報告します。インドへの行きと帰りに一泊づつバンコクに泊る予定だったのでPHDTシャツのタイ語版を着て行きました。すると飛行機内で(タイ航空)スチュワードに「あなたはタイ語が話せますか」と聞かれ、「No」と答えると残念そうな顔をしていましたが、「Tシャツの文字は何と書いてあるか知っていますか」と再び聞かれ、元気づく「Yes, of course. (はい、もちろん、生きたとは分かち合うことの意味です)」と答えると、スチュワードは満足きった表情で「Nice, T-Shirt (すてきなTシャツですね)」をくり返して去って行きました。その後は他のタイ乗客にも話しかけられて、お互いよくわからない英語を使って楽しい時を過ごせました。最初は、分かち合いの精神なんてこれっぽっちも持っていなかった私でしたので、Tシャツを着るのは少し恥しく、又、タイ人がどんな反応をするかわかったのですが……良い結果となりPHDTシャツに感謝しています。(東京・看護学生 波多野あき子さん)

PHD NEWS

基金寄託状況(会費・ご寄付)

1985年 8月 ¥1,513,587 ・ 84件
 9月 ¥1,378,511 ・ 203件
 計 ¥2,892,098 ・ 287件

会費納入のお願いに応じ、多くの会員からのご納入をいただきました。ありがとうございます。上記の通り、ご報告します。

理事会報告

10月21日、第11回理事会が開催され①85年度上半期事業報告および下半期予測 ②募金事業報告 ③次期研修生選考報告、その他の審議が行われました。

PHD説明パンフレット 和・英版が揃いました

PHD運動を説明する和文と英文のパンフレットの用意ができました。一人でも多くの方にPHDを知っていただくためにお使いいただきたいと思います。協会までご請求下さい。

フィリピン・スタディ・ツアー

来年3月中旬に、フィリピン・ルソン島中部

への現地研修旅行を企画しています。今回は、帰国した研修生のプログラム現場を訪ねると共に、農村・都市スラムで自らの生活改善及び社会の民主化のために頑張っている人々を訪ね、彼等と共に今日の日本とフィリピンの関係を考えてみたいと思います。

ネパール・フォローアップ・ツアー

ネパールでPHD運動をすすめる6名の元研修生の支援をプログラムとしたツアーを実施します。養鶏コースと編物・裁縫コースに別れて、村に入ります。詳しくはお問合せを。

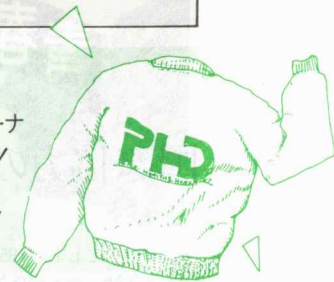
期間 85年12月20日～86年1月3日
 費用 約28万円 募集人数14名

アジア サロン スタート

今日、第三世界では多くの人々が貧困・病・飢餓に苦しむ一方、日本でも教育・公害・軍拡等の諸問題により私達の平和及び日々の生活がおびやかされる状況になっています。こうした内外の問題は、実は、地下水脈でつながっています。生活の現場で、こうした事柄に取り組んでいる多くの仲間と共に、私達の目指すべき「共に生きる」社会の実現のために、自由に語り合える場にしたいものです。月2回、詳しくはお問合せ下さい。

好評発売中
 PHDオリジナルトレーナー
 子供サイズも出来!!

サイズ110,120,130,140,
 150cm クリーム色のみ



編集後記

PHD提唱者岩村博士や草地総主事はよく『若い人達にアジアを自分の目と心で知ってもらいたい』と言われます。秋になってネパールの研修生・ガウチャンさんは、兵庫県三木市立三木中学校、丹南町立大山小学校に招かれ、ネパールの地理、文化、風俗等話し、生徒の皆さんから大好評を得、最後にはサイン攻めにあっていました。同行した編集委員も久々に、子供の心に浸透する生きた教育をまの当りにして感激し、研修生は技術習得に来日しているのみならず、日本とアジアの国々の大切な架け橋をも担っている事、改めて実感しました。今後共、多くの学校訪問が実現できればと願っています。(M・S)

PHDレターは次の方々によって編集されています。
 あなたも加って下さい。担当主事 藤野までご連絡を。

赤松恵美子(主婦・西宮市) 梶原靖子(主婦・神戸市)
 川那辺裕子(主婦・西宮市) 芝美代子(主婦・三木市)
 豊島璋子(主婦・三木市) 三浦英子(主婦・神戸市)

新規会員・寄付者ご芳名は、
 個人情報保護のため掲載しておりません。